13

# 藩閥政治の日本医学校に与えた影響
## ――日本医学校創立者 山根正次校長と苦難の学校経営――

岩﨑　一，唐澤　信安，殿﨑　正明，志村　俊郎
日本医科大学医史学教育研究会

1）はじめに

日本医学校創立者の山根正次は今日の日本医科大学の基礎を作ったにも不拘，資料が非常に少ない．済生学舎の突然の廃校で行き場を失った学生達の救済の為，済生学舎とも浅からぬ因縁のある日本週報社主の川上元治郎は長州出身で長州閥の領袖山県有朋の部下で国会議員の山根正次に懇請して日本医学校を創立させた．創立した学校の初代校長として15年も在籍したが何故かその資料が乏しいが残された資料を参考にその苦難の経営の跡を辿ると共に私立医学校の存続にも権勢を誇る長州閥の影が見え隠れする事実にも注目した．

2）渡韓以前の日本に於ける山根の活動

山根正次は安政4年現在の山口県萩市に眼科医山根孝中の2男として出生，明治7年長崎医学校に入学したが当時の校長長谷川泰の計らいで東京医学校に編入，以来長谷川との親交が続くが同15年4月，東大医学部を卒業，森鷗外の1年下にあたる．同年12月長崎医学校1等教諭に任命され同18年～19年にかけ同地方でのコレラ大流行時には検疫委員として活躍し流行の原因が水源にあるとして上下水道の設置を願い出る．また同19年長崎での清国水兵の暴行事件から「裁判医学」の必要性を長州人の山田顕義司法大臣に説く．同20年8月同校辞任，司法省に出仕するが法医学研究の為渡欧，同24年11月帰国後は内務省から警察医長，医務局長に任命され同35年迄11年間日本及び東京市の医事衛生に尽力した．同35年8月山口県から衆議院選に出馬，以後6回も当選している．性格は温厚篤実，恭謙で礼譲を尚び清廉かつ郷党後進の指導に懇切であったと伝えられている．

3）日本医学校長兼任の「韓国衛生事務顧問」

国会議員でもあり多忙を極める山根に無理を承知で学校の設立経営を懇願した川上であったが済生学舎廃校の経緯を熟知していただけに長州派の協力がなければ基盤の脆弱な日本医学校の創立は無理とみてその篤実な性格や長州閥を背景にその政治的手腕に期待したものと推察する．山根を補佐すべく15才年下の元書生，長州人の磯部検三が幹事（事務長役）に起用される．かくて同37年4月に「私立日本医学校」は開校した．当時韓国では日本の強引な干渉の為不穏な情勢が続いていたが同42年10月26日初代総監伊藤博文はハルピン駅で韓国人安重根に射殺され，同43年8月29日遂に日本は韓国を併合し総督府を設置した．同43年4月山根は現職の儘「韓国衛生事務顧問」として赴任し以後5年も滞在する．韓国での山根は各地の医院の開設，整備，後の京城帝大医学部の創設，看護婦，助産婦の養成等医学教育の振興をはかり，衛生施設の改善，また同44年満州でのペスト大流行に際しては北里柴三郎らと協力して朝鮮侵入阻止等大きな功績をあげている．

4）日本医学専門学校の異変

山根は大正4年1月韓国衛生顧問を辞任しているのでその頃帰国したものと思われる．設立時いずれ指定医学専門学校に昇格し卒業すればそのまま医師になれる筈で入学してきた学生はそれが実現不能と知って憤激し山根磯部らの不信を詰って大正5年5月16日遂に総退学を決行した．（約450名）事態を重く見た文部省は同年8月に再建指導の為，江原素六，中原徳太郎，早川千吉郎ら政財界の錚々たる大物を含む17名から成る評議員会を設置し事態の収拾を計った．

5）おわりに

国事に奔走していた山根には苦境に手を拱いて傍観する当局や長州閥には我慢ならぬものがあった．強力な評議員会の後押しや，山県傘下の桂太郎，寺内正毅らの援助で学校は蘇った．慧眼な川上元治郎の読みは当ったといえよう．大正15年には小此木，中原らの新体制のもとに悲願の大学昇格を果たすが山根はこれを見届ける事なく大正14年8月29日他界した．行年69才であった．